

「120点」「一番良かった」

「群馬イノベーションアワード(GIA)2023」のファイナルステージが開かれた28日、前橋市の日本トーターグリーンドーム前橋には、ファイナリスト15組の友人や家族らが応援に駆けつけた。2次にわたる審査を勝ち抜き、練り上げた渾身の事業計画をステージで堂々と発表する姿を固唾をのんで見守った。

友人、家族ら 発表見守る



族ロヒンギヤの難民キャンプの子どもたちへの支援をテーマに発表した。父の凱星さん(48)は「3年間の支援活動が二人の自信になり、堂々とした発表だった」と目を細めた。

最初の発表となったレジネスプラン部門「高校生以下の部」。唯一の中学生として出場したぐんま国際アカデミー中等部の鈴木聡真さん(3年)、杏さん(1年)きょうだい、ミヤンマーのイスラム教徒少数民

同部門「大学生・専門学生以下の部」では、高崎商科大3年の菅野航平さんが、コロナが落ち着き不要となったアクリル板の活用について発表。大学の授業と一緒にテーマを考えたという仲間3人が駆けつけた。宮

入奏大さん(21)は「内容を魅力的に伝えてくれた。120点の出来」とたたえた。中小企業のデジタルトランスフォーメーション(DX)の推進の実現をテーマに発表した共愛学園前橋国際大3年の出井樹利亜さんの発表では、友人が「樹利亜」と書いた自作の写真を持ってステージを見つめた。津久井星さん(20)は「昨日も遅くまで練習していた。落ち着いて話していた一番良かった」と笑顔だった。

同部門「一般の部」では「いちもん」の木下隆介さんが、職人のノウハウと凍結技術を用い、飲食店の人気メニューを冷凍食品として販売するプランを発表した。部下の前原彩乃さん(22)「前橋市は「いつも明るく前向きな上司。分かりやすい内容のプレゼンだ

った」と出来栄に太鼓判を押した。ベンチャー部門で「ことばのヤングケアラーをなくす」をテーマに発表したNPO法人「共に暮らす」代表のアジズ・アフメッドさん。大学時代の同級生、ム

ロ・オリバリ・ブルネラさん(24)「伊勢崎市は、自身の経験を振り返りながら「伝えてほしいことをしっかり伝えてくれた」と納得の表情を浮かべた。
(文 大栗和範、写真 宮崎浩治)



応援のうちわを手に発表を聞く来場者
＝日本トーターグリーンドーム前橋